

2004年が明けてから、年年少なかった分本当によく雪が降りました。2月22、23日は暴風雪。旭川を中心に上川地方で2000棟以上のビニールハウスが雪の重みで潰されました。自然の恵みで作物が育つのですから、仕方がないのですが……来る日も来る日も雪に責められていると、いいかげん今年は憂鬱になりました。



## 富良野通信2004春 平成16年4月4日

皆さんお元気ですか？また今年もアスパラのご案内をさせていただく季節になりました。年々異常気象を感じて暮らす富良野から今年もこうして富良野通信(あいも変わらず取り留めのない内容でごめんなさい)をお届けさせていただける幸せを思います。若林はまだ何とか頑張ってるんだとお思いの方もいらっしゃるのでは？

山にヒグマさんの食べる実のなる木が切られてしまっていて、毎年里に下りてくるのですが、去年はなんと7月15日と19日に我が家を通り抜け100mくらい下の家と200mくらい離れた家のハウスのスイートコーンを食べられました。誰も姿は見えていないのですが、さすがに気味が悪かったです。ヒグマさんは甘いものがお好みなので我が家のメロンを食べに来るのも時間の問題なのだろうか？

この辺りはつい100年位前は原生林で、ヒグマ、キタキツネ、エゾシカ、うさぎ、リスたちの楽園だったのですから迷惑干判なのは彼らたちですよ。別の所で母熊と小熊2匹のうちの母熊をズドーンとしたところ、母さん熊のおっぱいが出ていたそうです。これは切なかったです。何とか共存の方向を見つけたいとグループが出来ました。何とかなるといいのですが……

2003年は富良野開基100年だったのですが、9月1日には記念式典が行われ、各種イベントなども行われました。まだたった100年なのです。何千年だかよく分かりませんが鬱そうとした原生林を切り開いて現在に至ったわけです。苦労して切り開いたその農地も荒れているところが目立ちます。勿体無いし悲しいです。

その開基百年の記念の本が出ました。一つは北海道新聞社から「**富良野市・もうひとつの北の国から**」と富良野市が発行した「**民衆が語る・富良野100年のあゆみ**」の2冊です。「富良野市」の方には我が家を載せていただきましたし、もう一つの方は広報に載った文章が載っています。お恥ずかしいのですがそれを皆さんにご紹介したいと思います。

これはプロのライターの方が何度も足を運んでくださって私たちと話をしておいてくれたものです。

「富良野第2世紀の開拓者たち」 北海道ふるさと新書 **富良野市 もうひとつの「北の国から」** 北海道新聞社 より  
「人間にも自然にも害のない農業を目指して」 新規就農者 若林 一仁  
**農業をやりながら本来人間が持っている生きるための知恵を取り戻しつつあるとおもいます。**

北国の遅い桜が咲き始めた5月、頂に白い雪を残す芦別岳を間近に感じる畑。若林一仁さんと妻の恵己子さんはメロンの苗を植える場所の地温を保つポリフィルムの貼り付け作業をしていた。目で合図を送りながら素早く作業を進める姿を見ていると、何十年も農作業を続けている熟練の農家のように感じられるが、二人は農業を始めて10年にも満たない新規就農者である。

1994年7月、若林さんは山部で農地を取得し農家となった。譲り受けた畑には既にアスパラが植わっていて、就農したその年から収入を得ることが出来た。恵己子さんは「アスパラを一本一本カマで必死に収穫してね。なれない作業だから足腰がしびれて倒れそうになった」と当時を振り返るが、若林さんは肉体的な疲労とは逆に、「大地と共に生きている」という充実感を感じていた。

現在、若林さんが夢中になって栽培しているメロンは、とてもデリケートな作物である。水管理、温度管理、排水対策など、良質なメロンを作るためには収穫するまで一瞬たりとも気を抜くことが出来ない。メロンを栽培する4ヶ月間、若林さんは常に緊張感もって過ごす。「出荷間際まで、あえてメロンをいじめず。水を絶って、木が参るかどうかの瀬戸際を見極めると、糖度が上がってよい果肉が出来ますが、メロンとの我慢比べになる。夜眠っていても、ビニールハウス中の様子が気にかかって、熟睡できなくなるほどメロン栽培はきつい仕事です。でも、きれいにネットの張った素晴らしいメロンが出来ると、それまでの苦労なんか吹き飛ばしてしまうほどの満足感がありますね」

若林さんは農場に「富良野ハーモニーファーム」と名付け、自然との調和がとれた農業を実践している。

人間にも自然にも害のない農業を実践するために、無農薬栽培を基本としているが、メロンの場合は病気が出た時に治療薬として仕方なく農薬を使うこともある。しかし、予防的に最初から農薬を散布することはしない。ホームページでは自らの農業に対するポリシーや、農業を通して見た富良野の様子を紹介し、顧客に年に2、3回「富良野通信」を郵送している。そしてメロンに農薬を使った場合は、それを正直に公表する。消費者に自分たちが実践している農業への理解を深めてもらうためだ。

「川や土壌を農薬で汚染したくないし、自分たちも農薬を浴びたくない。アスパラ、ジャガイモ、カボチャは完全に無農薬栽培です。アスパラ畑では三年前からヒバリが巣を作るようになってね。これまでの農家の常識からすれば除草剤をまかないから草だらけで恥ずかしいことなのかもしれない。でも、鳥が住めるほど安全な畑だという証明だよ」

若林さんは作物のほとんどを直販や通信販売という形で消費者に届けている。顧客は一度買ってくれたお客さんからの口コミや、ギフトとして送られた先からの注文など徐々に増えているが、夏場には恵己子さんが月に数回物産センターなどで店頭に出立ち、自らの手で野菜やメロンを販売する。直接、消費者に手渡すことで食べる人の気持ちを知ることが出来るからだ。

「お客さんが・・・農家の母さんが売っている野菜ならまちがいない。と喜んで買ってくれます・・・一度売る醍醐味を知ると病みつきになってしまって・・・若林の作るものなら信用して買うよ。といわれるような売り方、作り方をしたいと考えている夫の気持ちが直売を始めてからわかるようになりました」と恵己子さんはいう。

就農した当初、無農薬農業は現実的な取り組みとは考えられなかった。しかし今はスローフードが注目され、消費者の食品の安全に対する意識も格段に高くなっている。「風向きが変わり始めて、いい風が吹いてきました。環境を汚さず、安全なものを作るだけでなく、出来ることなら放置されて荒れている農地に植林して自然に返したい。「自然から頂戴しろ。そして、つましく謙虚に生きろ」という「北の国から」の最終話で五郎さんが書いた遺言には感動しましたね。ここに来て、確かに物質的な豊かさは失ったかもしれない。でも豊かな自然と素晴らしい人々に出会った。農業をやりながら、本来人間が持っている生きるための知恵を取り戻しつつあると思います」自ら「平成の屯田兵」を名乗る若林さんは、大地を切り開くのではなく、共存していくという手法で新たな開拓を続けている。

ここで大好きな開高語録をスペースの許す限り

### 『河は眠らない』(ナンバー・ビデオ)より

#### 1. ナースログ。

森を歩いているとよくわかるんですけども、斧が入ったことがない人が入ったことがない森、というのがそこらじゅうにいっぱいある。

それで、土が露出していないで、シダやらなんかに覆われていますが、草とも苔ともつかないもので森の床全部が覆われている。

それから風倒木が倒れて、たおれっぱなしになっている・・・これが、実は無駄なように見えてて実に貴重な資源なのであって、風倒木がたおれっぱなしになっていると、そこに苔が生える、微生物が繁殖するバクテリアが繁殖する、土を豊かにする、小虫がやってくる、その小虫を捕まえるためにネズミやなんかがやってくる、そのネズミを食べるためにまたワシやなんかの鳥もやってくる、森にお湿りを与える、乾かない、そのことが河を豊かにする、ともう全てがつながりあっている。だから、あの風倒木のことを、森を看護しているんだ、看護婦の役割をしているんだ、というのでナースログ(nurse-log)というんですけども、自然に無駄なものは何もない、というひとつの例なんです。だから、そうすると、人間にとってナースログとは何でしょうか？無駄なように見えるけれども実は大変に貴重なもの、というもの人間にはたくさんあるんじゃないか？それぞれの人にとってのナースログ、とは何か？無駄をおそれてはいけないし、無駄を軽蔑してはいけない。何が無駄で何が無駄でないかはわからないんだ。ここがひとつの目の付け所ですね、これは大事なことですよ。無駄なこととしてと思うことはないんであって、いつかどこかでまた別のかたちで甦っているのかもしれないんだ。だから、人の心にとってのナースログとは何か？・・・こういう映画(註:アラスカの風景)を見るのもナースログですよ

#### 2. やりたいこと。

総じていうて人生は短い、だから、ランプの消えぬ間に生を楽しめよ、アルトゥール・シュニッツラー(Arthur Schnitzler)、という人が言いましたが、すかさずたくさんの方が、私ならランプが消えてからにしたいワ、という答えが戻ってきてきそうであります。

まったくその通りなんですから、私が言うまでもない、と。現代の、日本の、若いgenerationは、私よりも遙かに賢く、遙かに奔放に楽しんでいるでしょう。言うことはありません。やれるうちにやんなさい。

本当に30代というのは激しい。で、そのときにはわからない。自分で埋没しちゃってるからね。10年経って振り返ると、エライことを俺はやってたな、ということになる。各人それぞれにそういうことになるんじゃないかしらネ。今は君は、アニマルでもあるが人間でもあるんで、やりたいことをやんなさい、後で後悔しなさんな・・・やりたいことをやんなさい。

グラスの縁に唇を付けたらとことん、一滴残らず飲み干しなさい。後で戻ってきても、もう、滴は残っていない。今の内に飲み尽くしてしまいなさい。ま、いろいろ修行しなさいや。

#### 3. 悠々として急げ。

生涯を賭けて放浪と探索の時期が終わって、霧散していた自我が一点に集結して、そして彼は種族として甦るために、死の歓喜を味わっている、というか・・・それは種族の回生と繁栄のためなんですけれど、死と生の交錯の瞬間の中に生きている、と・・・どんな障害でも飛び越えていくからナア。切実。悲壮。人間の目から見ると、生涯でたった一回の、結婚と死、のためにね。結婚の直後の死ですからね、サケに来るのは・・・君は、悠々として急げ、ということやな。悠々として急げ、と言ってるんだヨ。

開高 健(かいこう・たけし) 昭和5(1930)年、大阪生まれ。大阪市立大学卒業。33年「裸の王様」で第38回芥川賞受賞。43年「輝ける闇」を発表、毎日出版文化賞を受賞する。著書に「裸の王様」「日本三文オペラ」「夏の闇」「ロマネ・コンティ・一九三五年」「私の釣魚大全」「オーパ!」「最後の晩餐」などがある。56年、ベトナム戦争から食味、釣りにわたる「すぐれたルポルタージュ文学」によって第29回菊池寛賞受賞。61年、自伝的長編「耳の物語」で日本文学大賞受賞。平成元年、食道腫瘍のため死去。病いと闘いつつ完成させた短編三部作「珠玉」が絶筆となった。